

政府開発援助（ODA）におけるキャパシティ・ビルディング

コンサルタント海外カンパニー 開発計画部 森尾康治 他

○キーワード

住民参加、合意形成、ソーシャル・キャピタル、ワークショップ、コミュニティ・エンパワーメント、ファシリテータ、キャパシティ・ビルディング、ソフト・コンポーネント

○概要

近年の政府開発援助（ODA）における2国間贈与（技術協力、無償資金協力）、ならびに2国間貸与では、援助事業の有効性の発現向上と持続性確保のための「キャパシティ・ビルディング」が注目されるようになり、いかなるスキームにおいてもその名称の差異はあるものの必須事項として取り扱われるようになってきている。このような外部環境のもと、開発計画部（KD）では、2000年4月の創部以来、都市開発・地域開発案件や復興支援案件などマルチセクターに係る上流（計画）分野（以降、主力分野1）に加え、組織・人材のキャパシティ・ビルディング（CB）、経済・財務評価、社会配慮等セクター横断型ソフト分野（以降、主力分野2）の業務に取り組んできた。しかし、主力分野1および2の中で、キャパシティ・ビルディングは、KD部員の多数かつ共通の業務機会となってきた分野であるにもかかわらず、内外から「その内容が不透明、中身がよく判らない」との意見・指摘を受けている。そこで、今般、KD部員がこれまで従事してきたキャパシティ・ビルディング案件事例の内容、方法論、ならびに、課題に対する対処方法などに関し整理し、このような指摘に応えるとともに、今後の案件形成・受注・消化に役立てたいと考える。

○技術ポイント

4事例をもって、下記事項を確認した。

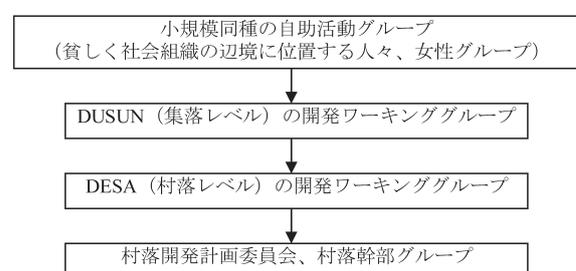
- ① これまでの技術普及の概念は「モノ」に偏りがちであった。セネガルで経験した「地域の将来ビジョン」策定を通じての合意形成手法の普及は、参加型農村開発の理念・ノウハウとして、広範囲に応用可能なものである。
- ② 「成果が何なのかわからない」と一般に言われる組織・制度強化コンポーネントであるが、モロッコの経験より、ソーシャル・キャピタル（社会資本）の概念を導入すれば、計画の内容および成果を明確にする上で有効であるといえる。
- ③ マレーシアの経験からいえることであるが、ともすれば「参加型」を裨益者へ強制しがちなプロジェクトでも、裨益者が楽しみながら参加できるプログラムをデザインすることによって、裨益者の自発的な参加を促進することができる。
- ④ 貧困農村コミュニティのエンパワーメント（プロジェクトにおいて資源・意志決定の住民自身によるコントロールが増すこと）においては、インドネシアの経験より、時間を十分にかけること、ファシリテータを養成し効率的な現場マネジメントを行うこと、ジェンダー配慮が重要であることがわかってきている。

○図・表・写真等



ソーシャル・キャピタルの種類と概念図

ソーシャル・キャピタル（SC）の区分には2つの類型がある。第一は、社会組織制度に関連した「制度的SC」および規範・価値観に影響する「認知的SC」であり、第二は、コミュニティ内の結束を強化させる「内部結集型SC」および外部との連携を強化させる「橋渡し型SC」である。



コミュニティレベルの理想的な草の根エンパワーメント

外部と隔離された小社会である農村部コミュニティの理想的草の根エンパワーメント概略は上図のとおり。トップダウンではなく、ボトムアップ型であること、開発ワーキンググループには村落幹部やエリート層はメンバーとして入らないことなどが重要である。